氏　　名　内田由紀子（うちだ ゆきこ）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第201号
学位授与の日付　平成15年3月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　文化と自己システム
——幸福感と自己知覚における検討——

論文調査委員　（主査）教授 山梨正明　教授 杉万俊夫　助教授 北山　忍

論文内容の要旨

本論文は，文化心理学の理論的枠組みに基づいて，特に幸福感と自己評価にかかわる文化的要因の解明を試みた比較文化的・実証研究である。全体は，4部からなる。

第1部では，文化心理学の理論と方法を，特に文化と自己の相互構成過程という観点から明らかにしている。とりわけ，文化という慣習と意味のシステムと自己という心理機能のシステムが相互に補完・強化し，共進化することを述べ，それに基づいて，社会的相互作用のパターンやそこにオンラインで生起する心理現象を観察することの重要性を強調している。

第2部は，第1部で述べられた文化と自己についての全体的論考を，近年注目を浴びつつある幸福感についての研究領域に適用している。まず，第2部の第1章で，幸福感についての従来の比較文化的研究を(1)幸福感の基準，(2)幸福感にかかわる心理的動機，(3)幸福感の規定因の3点に注目して総覧し，これらの諸点で文化間にかなりの相違があることを指摘している。一概にいって，欧米では幸福感は個人的な達成感と深く結びついているが，東洋において幸福感は対人的結びつきの実現とより密接に関連しているとしている。第2部の第2章では，このような理論的考察に基づいた実証研究を報告している。具体的には，情緒的サポートの友人間でのやりとりの程度の知覚が，日本人の友人の間ではアメリカ人の友人の間よりもはるかに一致していること，さらに，このようにして知覚された情緒的サポートは，日本においては幸福感を強く予測するが，アメリカではほとんど予測しないことを明らかにしている。

第3部では，第2部と同様の文化と自己に関する論考を自己評価に当てはめ，一連の実証研究を報告している。まず，第3部の第1章では，自己評価を明示的なものと暗黙なものに分けることの重要性を述べている。明示的自己評価とは，自己についての自らの評価的判断のことである。暗黙の自己評価とは，自らが意識していないにもかかわらず自己に結びついている評価的情報の総体を指す。近年編み出されてきた実証的方法は，このような暗黙の自己評価を一定の信頼性をもって計測することを可能にしている。本申請者は，これらの方法を用いた比較文化的研究を総覧し，(1)明示的自己評価においては，欧米文化圏では自己を非現実的に高く評価する自己高揚傾向が見られるが，日本など東洋文化圏ではそれは見られないかむしろ逆の自己批判な傾向が見られること，しかし，(2)暗黙の自己評価は，どちらの文化圏でも肯定的であることを指摘している。

さらに第3部の第2章では，暗黙の自己評価の指標の一つであるネームレター効果に注目した実証研究を報告している。ネームレター効果とは，自らの名前に含まれている文字（たとえば，「うちだ」であれば，「う」，「ち」，「だ」といった文字）を相対的により肯定的に評価する傾向のことである。この指標を用いた比較文化的研究から，暗黙の自己評価は，アメリカ同様，アジアの2つの文化（日本とフィリピン）でも肯定的自己評価がみられること，さらに，その程度は後者の文化の方がやや大きいことを示した。これに対して，明示的自己評価の指標では従来の研究を追試して，アメリカでのみ自己高揚傾向を見いだした。ここから本申請者は，暗黙の自己評価は，周囲との人間関係の良好さの表れではないかという仮説を提出している。つまり，欧米においては高い明示的自己評価を保つことが，アジアにおいてはそれを低くしておくことがそ

れぞれ良好な人間関係と結びつき，その結果，明示レベルでの自己評価の高低は異なるものの，暗黙のレベルではどちらの文化でも，ともに高い自己評価を示すのだとしている。

続く第3章では，日本における4つの実証研究を通じて，第2章で仮説として提出された暗黙の自己評価と対人的関与の関係を検討している。具体的には，4つの様々なプライミングを用い，社会的場面における自己イメージが活性化された場面では，暗黙の自己評価と対人的関与との間にかなり強い相関関係がみられることを明らかにしている。

上の分析によれば，明示レベルにおける自己批判傾向と暗黙のレベルにおける肯定的自己評価は，相互協調的な人間関係の異なった側面，もしくはその構成要素であるといえる。つまり，アジアにおいてこの組み合わせがしばしばみられる理由は，相互協調的な人間関係が頻繁にみられることによっていると考えられる。同様に，欧米において同様の組み合わせがみられない理由は，相互協調的な人間関係が比較的まれであるからであるといえる。このことから，たとえアジアであっても，相互協調的な人間関係の外では，上の自己評価の組み合わせは見られないであろうと予測できる。また，たとえ欧米であっても，相互協調的な人間関係の中にあっては，上の自己評価の組み合わせがみられると予測できる。第3部の第4章では，これらの予測を，暗黙の連合テスト（IAT）と呼ばれる技法を用いて検討し実証的証拠を得ている。

最後に，第4部では，本論文にまとめられた理論的実証的論考をもとに，文化心理学的観点からの自己研究の今後の展望をまとめている。加えて，付録では本論文に用いるために開発された思いやりの程度を測定する心理尺度の作成過程とその信頼性，妥当性を報告している。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は，文化と自己に関する文化心理学的な視座に基づき，特に日米両文化に焦点をあてて，幸福感と自己評価という2つの心理的領域にみられる比較文化的差異を解明しようと試みた実証的研究である。本論文は，以下の4点において特に優れている。

第1に，本論文の第2部に報告された幸福感についての一連の比較文化的研究では，欧米と比べて東洋では，幸福感の規定因として良好な人間関係がより重要であるという点が示されている。この点は，従来指摘されてきた可能性をより妥当性のある指標で明白に示したという点で重要である。さらに本申請者は，ここからさらに一歩進めて，東洋では人間関係が重要である結果として，親密な関係において社会的交換をより注意深くモニターしているという可能性を指摘している。ここで交換される資源は，いわゆる「もの」である必要はない。アドバイス，慰め，励ましといった情緒的サポートもこれに含まれる。そこで本申請者は，このような情緒的サポートに焦点を当てて，上記の仮説を検証している。具体的には，日米の友人のペアーを対象にして，片方(A)が他方(B)から様々なサポートを受け取ったと思っている程度が，BがAに同様のサポートを与えたと思っている程度に対応している度合いを検討した。そしてサポートの授受関係の認識の一致の程度は，日本人ペア―における方が，アメリカ人ペア―におけるより格段高いことを見いだした。この点は，方法の独創性，発見の新奇性，その理論的含意のいずれをとっても非常に重要であり，本論文の実証的貢献の一つの要となっている。

第2に，本論文の第3部で報告されている自己評価に関する比較文化的研究は，自己が自己を判断対象として判断した明示的自己評価と，自己がそれと気づかぬ内に自己に結びついている評価的情報（つまり，暗黙の自己評価）の関係を扱っている。従来の自己評価についての比較文化的研究は，おおかた自己評価の明示的側面に限られている。ここから，欧米では自己を非常に肯定的に評価しようとする傾向（自己高揚傾向）があることが様々な形で示されてきた。これに対して，日本などの東洋の諸文化では，自己高揚傾向はほとんど見られず，むしろ，それとは全く逆の自己批判的傾向がしばしば見られる。本論文の重要な貢献は，暗黙の自己評価の指標を用いた場合には，文化にかかわらず，自己には肯定的評価が結びついていることを示した点にある。この点は，暗黙の自己評価についての2つの異なった指標を使って明白に示されている。本論文で得られた実証的知見は，自己評価の分野での研究を大きく前進させるものである。

さらに，第3として，本申請者は上述の2つの自己評価の対比から一歩進めて，次の2つの重要な仮説を検証している。その第1は，暗黙の自己評価の源の一つは，関係をもっている他者からの肯定的評価であるというものである。つまり，欧米の自己高揚も東洋の自己批判も，ともに，それぞれの文化にあっては肯定的な他者からのフィードバックを誘発しており，その結果，これらはともに暗黙のレベルでは肯定的な自己評価と結びついているだろうとした。第2の仮説は，明示的レベ

ルにおける自己批判と暗黙のレベルにおける肯定的自己評価の組み合わせは，相互協調的な人間関係に固有のものであるというものである。この仮説によれば，上記の組み合わせは，相互協調的な関係の文脈においてであれば，たとえ欧米でも観察できてしかるべきである。これらの仮説は，自己評価の社会・文化的ダイナミズムを精緻化しているという点において高く評価できる。また，仮説を検証した実証的証拠も，新奇性にとみ非常に高く評価できる。

本論文の学術的貢献の第４は，理論的なものである。従来，自己や幸福感についての研究は，心理学における他の分野同様，欧米で，欧米人を対象にした理論やデータが普遍的なものであると仮定して進められてきた。しかし，本論文の第１部に示されている理論的考察では，こういった従来の慣行に懐疑的な立場が明らかにされている。つまり，もしも，自己や幸福感といった心理的現象が，社会や文化の慣習や暗黙の意味構造と相互構成的であるならば，これらの現象やプロセスは，異なった文化や社会では異なった様相を示すであろうとする立場である。ここに示されている理論的論考は，このような立場から特に幸福感の問題に迫った初めての試みである。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは，言語，知覚，思考，推論等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが，本研究は，この目的を特に自己と社会的認知において追求した基礎的研究として高く評価できると共に，今後の社会・文化心理学への貢献がさらに期待される。

よって，本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また，平成15年２月３日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。